

アイヌ民族の歴史と文化

第5回

—〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる—

歴史と文化を考える、
2つの展示会のご案内

小川 正人 (おがわ まさひと)

北海道博物館学芸副館長兼
アイヌ民族文化研究センター長1994年6月北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員となる。
2015年より同研究センターの統合による北海道博物館発足に伴い
北海道博物館勤務。アイヌ史を担当、特に近代アイヌ教育史を中
心とする調査、研究及び博物館の業務に当たっている。

この連載もはや5回目を迎えました。

連載では、「アイヌ民族の歴史と文化」というタイトルを踏まえて、〈歴史〉と〈文化〉のそれぞれを紹介するばかりでなく、〈歴史〉とともにある〈文化〉、〈文化〉の様相から見える〈歴史〉——といったように、互いの要素が深く関わっていることを意識してきました。

この秋から冬にかけて、各地でアイヌ文化に関する展示が開催されますが、それらの中でも、今年度は、この連載のテーマを意識して取り組んだ展示が2つ、北海道の内外で相次いで開催されます。今回は、この2つの展示会を取り上げ、それぞれのあらましや特徴をご紹介します。

国立歴史民俗博物館企画展示「学びの歴史像」

先ず一つめは、10月12日（火）から12月12日（日）まで、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で開催される「学びの歴史像 わたりあう近代」です。

展示会全体のテーマは、江戸時代終わり頃から明治にかけての、日本列島に近代国家が成立していく時代を主な対象とした教育、人々の学びの歴史です。政府や地方行政、実業家、宗教者がどのような教育を目指したのか、という視点とともに、展示全体としては、むしろ列島各地に生きた人々の〈学び〉を中心に据えたい、との考えのもとに、学校教育のほか「博覧会」「衛生観念」などの、さまざまな切り口から捉えなおしていこう、というものです。

全6章からなるこの展示の中に、アイヌ民族と教育・学知との関わりを主題にした章を設けました。第5章「アイヌが描いた未来」です。

第5章「アイヌが描いた未来」

第5章の展示は、国立歴史民俗博物館の樋浦郷子先生や展示課の皆様とともに、この連載の第2回を執筆いただいた谷本晃久先生（北海道大学）と私とが、主に担当させていただきました。

アイヌ民族が暮らしてきた北海道やサハリン（樺太）、千島などの地域は、19世紀から20世紀——日本史で言えば江戸から明治、大正、昭和——へと動いていく時代の中で、主に日本とロシアという2つの国家による国境の画定やその移動による大きな影響を受けます。また、北海道やサハリン（樺太）では、「開拓」の名のもとに開発が進められ、多くの移住者が暮らすようになり、アイヌ民族の生活と文化は大きな圧力を受けることとなります。

第5章「アイヌが描いた未来」では、こうした時代の厳しさを見据えつつ、そうした時代のもとでアイヌ民族が自ら社会とわたりあおうとしたすがたを捉えたいと考えました。章のタイトルを「描いた未来」としたのは、このような意図を込めたものなのです。

19世紀の日本列島北方域—アイヌ民族がとりむすんだ (知)

第5章「アイヌが描いた未来」は、第1節「19世紀の学知とアイヌ社会」から始まります。江戸時代終わり頃の日本列島北方域が舞台です。

一般的な日本史や北海道史で学ぶ幕末の歴史は、日本とロシア、そして中国（清朝）との間での領土の拡張、確保をめぐる動きが中心になりがちです。日本史で言えば、幕府や松前藩の動き、間宮林蔵や近藤重蔵、松浦武四郎らによる“探検”“踏査”、ロシアに漂着し様々な見聞を積んだ大黒屋光太夫のような人物の足跡、幕末の会津藩や八王子千人同心による北海道への移住と警護の試みなどは、学校の授業ばかりでなくテレビの歴史番組などでも取り上げられることがあると思います。そして、このようなかたちで語られる歴史の中では、アイヌ民族などの先住民族は、これらの国家に挟まれ囲まれた少数者であって、それぞれの国家が自国に同化させようと「教化」や「教導」を及ぼした対象としてイメージされることも多いようです。

今回の展示では、そのような江戸幕府やロシアが持っていたアイヌ民族に対するイメージ、認識とともに、アイヌ民族がこれら複数の国家の仲介者として動いたという面、例えば千島のアイヌ民族が仲介となってロシアと日本の意思疎通や相互の情報収集が行われていたことも取り上げていきます。それは、千島アイヌが、ロシアと日本という2つの勢力のそれぞれとわたりあう中で身につけた知見が発揮されたすがたの一つでもあったのです。

明治の時代—おしよせる「開拓」の圧力の中で

1869（明治2）年、政権を握ったばかりの明治政府は、それまで和人が「蝦夷地」と呼んでいた地を「北海道」と改称、はじめて11の国と86の郡を置きました。そして北海道の本格的な開発を開始します。それまで和人が多く暮らしていたのは、もっぱら箱館（このころから函館）や福山（松前）、江差など道南の一部でしたが、この頃から北海道の各地に多くの移住者がやってくるようになりました。北海道開拓、と呼ばれ

る事業・時代の始まりです。

それは、この地に先住してきたアイヌ民族にとっては、土地の所有から政治・社会・経済までが日本国のものとなり、さらに自分たちの暮らす地域でも移住者のほうが圧倒的な多数者になっていく、そのような大きな動きの中に否応なく置かれることでもありました。

おしよせる「開拓」の圧力のもと、この社会での自分たちの未来をどのように考えるか—展示第5章の、第1節の後半から第2節「近代化の実践と学知」では、明治時代から昭和の始め頃までの時代の中での、アイヌ民族が求めた学知、教育のあり方がテーマです。

学校をつくる—大きな決断ゆえの切実な希望

〈日本〉が圧倒的になった社会で生きて行く、そのためにアイヌ民族の多くが決断せざるを得なかったのは、子どもたちが、この新たな時代で生きて行くために必要な学問を身につけていくことでした。それは、アイヌの人々にとって、それまでの自分たちの生き方を大きく変えていかざるを得ない、厳しい葛藤や決断を幾つも重ねることだったはずでした。



写真1 伏根弘三と山縣良温ら

この連載の前回「口承文芸」でも、研究者たちからは名だたるアイヌ語の伝承者とされる人が、いっぽうで自分たちの孫には日本の昔話ばかり語ったという例が紹介されていましたが、それはまさに、こうした厳しい決断の一つだったと思います。

この時代、各地でアイヌの人々が取り組んだことの

一つが、自分たちの地域の学校を整備することでした。学校がまだ設けられていない地域では、自分たちで学校をつくろうとした人たちもいたのです。

前ページの**写真1**は、1901（明治34）年頃の帯広で撮影されたものと推測される写真です。子どもたちの後ろに立つ、帽子を被った男性が伏根弘三（1874～1938）です。

伏根弘三が生まれ育った帯広は、十勝地方でも内陸部で、移住者の入植は海岸部などよりも遅かったのですが、それでも1880年代以降から移住者が増え始め、1890年代に入ると植民地の区画や市街地の形成が進んでいきます。伏根の回想によれば、彼は、帯広でも子どもたちに新しい時代に向けた教育を受けさせたい、と道庁の支庁に学校の設置を願い出ますが、支庁の担当者は、和人の子どもの学校も十分に設置できていないので、といった理由を挙げて積極的には応じてくれません。それならば、と彼は、自分で学校をつくる、と決心、自分の家に子どもたちを集め、教員には、このころ帯広の集治監（現在の刑務所にあたります）で教誨師きょうかいしをつとめていた仏教（浄土真宗東本願寺）の僧侶・山縣良温（1866～1934）を招き、1901年には子どもたちの教育が始まっていたことが、当時の新聞にも報じられています。

写真1は、いつ・どこで撮影されたものか、確実な記録はわからないのですが、伏根と山縣（写真右端の、座っている男性）、そして子どもたちが写っていることから、伏根が子どもたちの教育を開始した当時のものと推測されます。伏根の隣の木の文字は「開教記念之櫻」と読めるので、学校の設立を記念したものだったのかもしれませんが。

展示では、開拓使や三県、北海道庁による教育政策を追いつつ、各地でのこのような取り組みを取り上げています。

中等学校への希望

明治の終わり頃——1910年代に入ると、アイヌ児童の就学率（学齢期の子どものうち就学者の割合）は90%を超え、北海道全体の平均値に近づきます。しか

し社会からの差別や偏見はおさまらず、小学校（当時は尋常小学校）からさらに高等小学校や中等学校（高等女学校、中学校など）への進学者もわずかでした。

このような中で、アイヌの人々の社会に向けた活動には、地域の小学校の充実とともに、子どもたちの中等学校への進学を支援する動きも見られるようになります。この連載の第1回で、キリスト教伝道者のジョン・バチラーがアイヌの若者の進学を支援するため寄宿舎（バチラー学園）を設けたことを紹介しましたが、それも、こうした動きの一つでした。



写真2 『ウタリグス』1926年8月号(表紙)

写真2は、連載第1回でも取り上げた札幌でアイヌの若い世代が中心になって刊行していた雑誌『ウタリグス』の、1926（大正15）年8月号の表紙です。

「ウタリグス」と大きく誌名が記された下に描かれているのは、学校の校舎とキャンパスの風景です。その下に添えられた文章には、「之はウタリのものです。／私たちに是非一つなくてならぬ学校です。／是非建てたいと念願して居る中等学校の／幻でございます。／ウタリのものです。／ウタリ自身で建てなければなりません。」などの言葉が綴られています。これは、このころ、歌人としても知られるバチラー八重子（1884～1962）らが取り組んでいた中等学校建設を目指した活動の一端がしるされたものです。

展示では、こうした学校に関わる動きばかりでなく、旭川地域でのアイヌの人々の活動など、アイヌ民族自身による実践や発信を幅広く紹介していきます。

アイヌ民族文化財団アイヌ工芸品展「アイヌのくらし—時代・地域・さまざまな姿」

もう一つ、ぜひご紹介したいのが、10月16日（土）から12月12日（日）まで札幌市厚別区の北海道博物館で、さらに来年（2022年）1月15日（土）から3月6日（日）まで群馬県高崎市の群馬県立歴史博物館で開催する、「アイヌのくらし—時代・地域・さまざまな姿」です。

公益財団法人アイヌ民族文化財団では、前身のアイヌ文化振興・研究推進機構の時代から、毎年、北海道内のほか国内の都府県を会場に、「アイヌ工芸品展」を開催しています（昨年度＝令和2年度のみ、新型コロナウイルス感染拡大のため休止しました）。アイヌ民族の伝統的な民具や祭具のほか、それらの技法や素材などを活かした現代の作品などを、毎年、さまざまなテーマのもとで紹介してきました。

今回は、これまでの工芸品展の考え方を踏まえつつ、さらに、これらの作品の展示にあたって、展示される「モノ」を起点として、その背後にある人々の〈くらし〉を紹介する、という考え方が基本に据えられています。

私も、博物館という、“収集された資料”を預かる職場で勤務し、かつ、歴史を学ぶ者として、一つ一つの“資料”は、どのような人々が、どのような時代の中で作り、使い、そして残され、また誰の手をへて、いま、この博物館に至っているのか、それらを知ること（「わきまえること」と言ったほうが良いかもしれませんが）、大事なことだと思います。特にアイヌ民族の文化については、例えば民具は、ともすれば「アイヌの民具」といった括りで、素材や製法、伝統的な使用法などは紹介されるけれども、それらが、どのような“時代の様相”“地域のすがた”の中にあっただのか等、〈歴史〉と〈文化〉とを結びつけて捉える、という当たり前のことが、十分ではなかったと感じて

います。

この展示では、序章「歴史の中のアイヌ工芸」に始まり、第1章「北海道 日本海沿岸の人びと」から、オホーツク海沿岸、北千島、樺太（サハリン）、太平洋沿岸……と、時代と地域をめぐっていきます。

ぜひご覧いただきたく思います。



アイヌのくらし—時代・地域・さまざまな姿 aynu teeta cikor a puri, tane okay cikor puri

2021年10月16日（土）～12月12日（日）
北海道博物館（札幌市厚別区厚別町小野幌53-2）

2022年1月15日（土）～3月6日（日）
群馬県立歴史博物館（高崎市綿貫町992-1）

学びの歴史像—わたりあう近代—

2021年10月12日（火）～12月12日（日）
国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市城内町117）

※休館日、開館時間、入場料などは、各館で発行するチラシや各館のウェブサイト等でご確認ください。